

あ る い は 現 在 進 行 形 の 黒 歴 史

— この二人きりの世界で —



著：あわむら赤光

イラスト：refeia

あるいは現在進行形の黒歴史 ―この二人きりの世界で―

「学生なら誰もがウキウキハッピーな夏休みのある朝――

吉岡英二（十五歳・高一）こと俺は、ベッドの上で盛大なため息をついていた。

起きがけ、目についた両手の甲のせいで、イヤな現実を思い出してしまったからだ。もっと夢の世界に浸っていたかったからだ。

「ハァー。どうすつかなあ、これ……」

右手の甲には、真つ赤な薔薇の文様がタトゥーのように入っている。

左手の甲には、黒い六芒星が刻まれている。

随天使たちとエンゲージした証なんだってさ、これ……。笑つちゃうだろ？

そんな荒唐無稽な話、家族以外の誰に言っても信じてもらえないし、だから他人から見たら今の俺は「ヤダこの子、高校生で刺青入れてるわよ」教育の荒廢が……「ヒソヒソ」状態なんだ……。

今のところ、外出する時は「怪我したんで」と言つて、包帯を巻いて誤魔化してる。でもそれにも限度がある。いつまでも怪我してたらさすがに不審がられる。

だから俺は、どうにかこの文様を隠す手段を見つけないといけないんだ。できれば学校の補習が始まる来週までに。この土日でケリをつけたい。

「シナ簡単に思いつくわけねえよなあ……」

もう一度盛大にため息をついて、何とはなく勉強机に目を向ける。その上にある大学ノートにベッドから手を伸ばそうとして――

「英二きゅん、おつはよー！ー♥」

いきなりアホが部屋に飛び込んできた。

遺憾ながら美少女だ。ちと童顔なのが俺的には玉に瑕だが、学校の奴にはかえってモテるらしい。まさにカモシカのような脚線美を躍動させ、ツイントールをなびかせ、両手を広げて抱きつこうとジャンプしてくる。

「起きて、起きて、朝だよー！ー♥」

その眩いほどの笑顔に向かい、

「もう起きてるだろぅが！ー」

俺はつかんでいた大学ノート（辞書みたいに分厚い）を垂直に叩きつけた。

「ぐおおおおおおお」

撃ち落とされ、両手で顔を覆って足をバタバタさせ、床の上をのたうち回るアホ娘。

「今日は何トチ狂ったこと考えてんだ？ あん？」

「だつて可愛い幼馴染が朝、部屋に起こしに来てくれるってラノベじゃ定番じゃん！」
 「おまえは可愛くねえし、幼馴染じゃねえ」

そう、こいつの名前は吉岡楓子。中二。
 俺の妹だ。

「じゃあ、可愛い妹が朝、部屋に起こしに来てくれるってラノベじゃ定番じゃん！」

「珍しく早起きしたなと思つたら、そんなくだらねえこと企んでたのか……」

俺はドつと疲れて肩を落とす。

このアホ妹は重度のラノベ愛読者だ。いわゆるオタクだ。それ自体は大変よろしい趣味だと思うが、問題なのは現実とフィクションの区別がつけられず、今みたいに突発的に奇行に走る。あげく俺に迷惑をかける。

今だつてたまたま俺が、この《絶対少女黙示録》と表紙に書かれたノートを読みたくなって手を伸ばし、咄嗟にそれを凶器に変えて迎撃できていなかったら、楓子に抱きつかれていたであろう。

うわあ想像しただけで鳥肌立つたわ……。

「もー、兄ちゃんてばこんなかわい〜い妹が起こしに来てくれて、何が不満だつてのよ？」

「不満しかないわ……」

どこの世界に妹に起こされるのがうれしい兄貴がいるんだ？ 俺だったら「兄貴の体面も守

れねえ情けねえ奴」だつて恥入るわ。

「あー、そっかー！ わかつた！」

俺が今どれだけ鬱陶しく思っているのかわかつてくれたか、楓子がボンと手を打つ。

「ウワン兄ちゃん、もつとえつちな起こし方がよかつたなんて、それじゃラノベじゃなくてエロゲの定番だよ」

「今すぐ更生しろ！」

俺はもう一度分厚いノートを楓子の鼻面に打ち込んだ。

「げぼー！」

イヤンイヤンと身をくねらせていた楓子がもんどりうつて倒れ、痛みを堪えるために床をバン叩いている。

「おまえ、家族に隠れてエロゲなんかやってんのか!」
 俺はベッドの上に仁王立ちし、目を吊り上げて楓子を睨みつける。

「ひつ、ひがつ、やってないっ。ほーゆーもんだつてひいただけっ」

なんだただの耳年増か。お兄ちゃんをあまり心配させるな。

「兄ちゃんだつてどーせこの辺にえつちな本隠してるくせに！」

痛みから復活した楓子が、そのまま這いつくばってベッドの下を覗き込んだ。

「ふん、あるわけねーだろ」

だが俺は動揺せず楓子の好きにさせる。この部屋に見つかってやましいものは一切ない。

「うそ……ほんとだ……」

「なんだったら家探ししてくれてもかまわないぜ？」

そりや俺だって酒もタバコもえっちな本にも興味はあるが、ああいうのはちゃんと法律で認められた年齢が来るまで手を出しちゃいけないのだ。

「前から思ってたけどさ……兄ちゃんてやつぱり——」

楓子が畏れのこもった目で見上げてくる。

ん？ 俺がいかにも品行方正な男かよくわかったか？ 見習ってくれていいんだぜ？ てか頼むから見習え。

「——ガチホモなの？」

「おしおきが足りなかったようだな！」

「ぎゃー！ だってあたしも女の子好きだからさ、同じ血を引いている兄ちゃんが男の子好きで

もおかしくな——ぎゃー！」

「オラ、菌を食いしげれ！ 右の頬をぶたれたら左の頬を出せ！」

「違うってんなら女体に興味示してよ！ あたしのおっぱい揉ませてあげるから！」

「膨らんでない乳はおっぱいって言わねえんだよお！」

「ちっぱいのよさがわからない人は日本人じゃないと思う！」

「テメエこそ日本語で喋れや！ ちっぱいってなんだよ!？」

朝から血圧上げさせるんじゃないやねえよ、このバカ妹がっ。

「（・・・）」



「はっはっは、喧嘩するほど仲がいいとはまさしく君たちのことだね！」

男物のジーンズを穿いた赤毛の少女が、胸を反らして芝居がかった笑い声をあげる。

「……安眠妨害」

青い髪を後ろで一本結びにしているワンピース姿の少女が、無表情で不平を言う。

赤い方が紅薔薇の剣姫ロザリンド。青い方が殺戮の天使マリス。普段着を着てると、ただの女の子たちにしか見えないが——

ワケあって我が家に居候する墮天使たちである。

どういうワケがあるのかは文庫本にして一冊くらいの説明が必要なので勘弁してくれ。

「朝っぱらから騒いで悪かったよ」

俺は頭の天辺をさすりながら、ぶすつとして謝った。



隣では白目と口を開けた楓子が座卓に突っ伏している。漫画だったら口から魂が抜け出てるだろう。

朝食の後に四人で、居間で食休みしているところだった。古くてボロい我が屋だが広さだけはなかなかで、この部屋も十二畳あって寛げる。山の中にあるので、窓や障子を開ければ涼しい風が吹き抜け、真夏の暑さも凌ぎやすい。冷えた麦茶も美味い。

ただし食休みといつても、俺と楓子は朝飯抜きだった……。

早朝から楓子と大騒ぎ（兄妹ケンカとも言う）をやっちゃまった結果、躰の厳しい父さんに「家の中で暴れるとは何事か！」と二人ともぶん殴られた。

うちの父さんは怖い。てか見た目からして熊とステゴロでできそう。そんな人の拳骨食らったもんだから、頭がまだヒリヒリしてた。楓子なんか気を失ったままだ。

その上、「おまえたちは朝食抜きだ」と来たもんだ。食い意地張ったマリスが「……二人の分は私がちゃんと食べるから安心して」と来たもんだ。

そもそも俺はアホの楓子にからまれただけなのに。被害者なのに。災難だぜ。ったく、涼しいうちに勉強しときたいのに、腹減ってそんな気分じゃねえよ。

「まあそう不貞腐れなくてくれたまえ。英二君のためにいいものを用意してあげたよ」

俺が鬱つてるそこへ、慰めるように言うロザリンド。

「なんだよ？」

俺は全然期待せずに目を向ける。

「その手——いつまでも包帯で隠すわけにもいかないよ、嘆いてただろう？」

ロザリンドはもったいぶりながら、座卓の下から謎の小瓶をとりだした。

「おお、心配してくれてたのか」

「無論、騎士たるもの、困っている人は見過ごせないさ。ボクが何とかしてあげよう」
自らを騎士だと言い張るロザリンドが、キザつたらしく前髪をかき上げた。

いつもはウゼーとか思っちゃう俺だが、今日ばかりは頼もしく見える。輝いて見える。

「……嘘つき」

ところが、水を差すようなことを横からマリスがボソつと言った。

「な、何が嘘だと言うんだい、殺戮の!？」

「……困っている人を見過ごせないなんて嘘。劍姫は英二とフラゲ立っていただけ。下心がミエミエ。あざとい」

「ポポボクの騎士道を侮辱するんじゃない！」

よっぽど怒ってるのか、ロザリンドが頬を真っ赤にしながら抗議する。

そのまま二人は視線で火花を散らすが——

「待って待って！ 話を続けようぜ」

これ以上ヒートアップする前に、俺は割って入る。だって、ロザリンドが



何を用意してくれたのか気になって仕方ないんだよ。

「んで、その瓶の中身何？ほんとに俺の両手がなんとかなるのか？」

俺がいかにも逼迫ひつぱくしてるか伝わったのか、マリスは無言になって引き下がってくれる。

「うむ。このファンデーションを文様の上から塗ぬれば、隠せるんじゃないかと思ってね」
また、ロザリンドは胸を張いばりながら瓶を掲げ上げる。

「ファンデーションで化粧品けしよひんの？でも俺、使ったことねえよ……」

「大丈夫だとも！簡単だし、最初はボクが手本を見せてあげるから、すぐ憶おぼえられるさ」

「へー、おまえて化粧なんかできたんだ？」

「そりゃあ、ボクは元演劇部だから——ゲフンゲフン」

俺の問いに答えようとして、ロザリンドがいきなり咳せき払いで誤魔化ごまかす。

「騎士たるもの、戦場で散めった盟友に死いに化粧の一つもしてやる事ができなければね！」

「ふーん、そう」

「な、何だい、その疑いの目は!？」

ペーティーにー。

墮天使であるロザリンドが、どうして元演劇部なのかというワケを説明すると文庫本一冊（略）ともかくこいつはその過去を隠したが、あくまで自分は今も昔も「紅薔薇の剣姫」だと言いい張はらないと気がすまないんだ。

「まあいい、早速試そうじゃないか。ファンデのノリをよくするため、石鹼せっけんを使ってよく手を洗あってきてくれたまえ」

化粧下地けしょうげというらしい。俺は早速洗面台せんめんたいに行き、入念にんねんに手を洗あって居間に戻った。

「じゃあ、頼むわ」

ロザリンドに右手を差し出す。

「ぎゅ」

それをロザリンドが左手で握にぎってくる。

握にぎったまま時が止とまったように動うかなくなる……。ん…………？

「……待まちって、劍姫」

どうかしたのか俺が尋たずねるより先に、マリスがロザリンドの肩をつかんだ。

「な、何をする、殺戮ころの!？化粧の邪魔じゃまをしないでくれたまえ！」

「……やるならさっさとやって。早く英二の手を放はなして」

「その言い方は何だね!?まるでボクが英二君の手を、いつまでも握にぎっていたいとも言わんばかりじゃないかね!？」

「……違うのならどうして頬が赤いの?」

「こ、こ、こっここっこ、これはそう、例えるなら騎士が戦場を前にして紅潮こうしゅうするような、つまりそれくらいボクはこの化粧を命がけでやろうと緊張じんぱうをしていてだね!」

ごめん、命がけで化粧されても俺が困るわ……。

「もうわかったから続けてくれ、ロザリンド。マリス、おまえもいちいち茶々入れるなよ」

「……英二は私を邪魔者扱いする気？」

「そこまでは言わないけど、大人しくして欲しいのは——」

俺が答え終える前に、マリスがすつくと立ち上がり、

「……浮気者は殺す」



一本結びにされてる青い髪がニョロリと伸びて、ニユルリと俺の首筋に巻きついた。

「で、出たー！ マリスさんの【鋼糸鑿陣】だー！——」

さらに突然、楓子が上がって絶叫する。

おまえ、気絶してたんじゃなかったの？ なに？ おまえしか嗅ぎとれないもんが臭ったり

すんの？

「解説しよう！ 【鋼糸鑿陣】とはマリスさんが自らの髪の毛に殺戮の魔力を注ぎ

こむことで、自在に操作、伸縮、刃化する技なのだー！——」

「うっせえ！ テメエは誰に向かって解説してんだよ！」

「え？ だっってお約束じゃん。様式美じゃん」



「黙れ——つてうひゃああああ」

首筋に巻きつくマリスの【鋼糸鑿陣】が、刃の冷たく硬い感触を持ったままざわざわ蠢いたので、俺はそのおぞましさに総毛立つ。

「……私を無視しないで、英二」

「ハイ、ゴメンナサイ！」

死にたくないの即謝る俺。

「つてか、何でおまえはすぐ殺したがるんだよ！」

「……殺戮の天使だから仕方ない」

「仕方なくねえっ。俺は納得しねえっ」

「……きゅっ、つて天国に行く？」

「ハイ、ゴメンナサイ！」

死にたくないの即土下座する俺。

そこへ——

「手荒な真似はやめたまえ、殺戮の」

魔法のように顕れた腰の鞘から、ロザリンドがしゃらんと剣を抜き放つ。

仁王立ちすると、男物のジーンズが凛々しく映える。

その細い鞘にどうやって入ったの？ と不思議なくらいでかいオバケ大剣を軽々一閃——

マリスの【鋼糸塵陣】を両断した。

青い髪がハラハラと散り、おかげで俺は死の脅迫から解放される。

「きゃあああああああんロザリンドさまステキすぎりゆううううううう」

楓子が黄色い声でその居合斬りを絶賛し、

「助かったぜえ……」

俺は胸を撫で下ろす。

時に命とも言われる女の髪を、切られたマリスへ同情する奴はここにはいない。以前は俺も「可哀想なことすんなよ！」ってパニクったものだが――

「……ニユルリ」

マリスは無表情で切られた分だけ髪を伸ばし、元の長さにとろえた。

そう、こいつの髪は伸縮自在なので大騒ぎする必要なんてどこにもないんだ。

ただね……。

「……私の邪魔をする者は殺す」

「ふん、君は二言目には殺す殺すと去がないな。いくら殺戮の天使でももう少し語彙と教養を身につけたまえ」

我が家が灰燼に帰す心配はした方がいいかもしれない……。

うん、この堕天使二人が本気でケンカしたら、それくらいできちやうんだ……。

マリスが【鋼糸塵陣】を威嚇するようにユラユラ蠢かせ、ロザリンドがオバケ大剣の切っ先を突きつける間で、俺は生まれたての仔馬のように震える。

何とかしてこの危機的状況を回避せねばと、頭だけはフル回転させる。

「きゃほー！ まずはマリスさんの【漆黑爆弾】かな？ ロザリンド様の【ミカエルの剣】が先かな？」

このバカ妹は全然助けにならねえからな。きっと我が家が焼け野原になった後でも、一人で大興奮してるだろうぜ……。

父さんと母さんがお勤めに行ってる間は、俺が留守を守らなきゃ……。

よし、この作戦で行こう――

「なあ、マリス……？ 今朝、俺と楓子がケンカして、朝飯抜きになっただろう？」

「……それが何？」

「今、おまえらがケンカしたら、父さんが怒って昼飯抜きになるんじゃないかなあ？」

「……劍姫、何してるの？ 早く英二の問題を解決しよう」

マリスは一瞬の早技で座卓の前に正座し、ファンデーションの瓶を差し出した。

「う、うむ……そうだね」

ロザリンドも毒気を抜かれたように剣をしまし（魔法のように消した）。

ふいー、マリスが食い意地張ってるおかげで、何とか今日も我が家の危機を回避できた

ぜ……。

「じゃあ改めて頼む、ロザリンド」

「はっはっは、大船に乗ったつもりでこのボクに任せたまえ」

男勝りに叫々大笑し、自分の胸をどんと叩く。顔も美少年然としているが、仕種も全部男らしい。自信に満ち溢れている。

ロザリンドつてのはそういう奴なんだ。

「（……）」

結論から言うと、ファンデーションではダメだった。ロザリンドが慣れた手つきで塗ってくれたんだが、下から文様がうつすらと見えてしまった。

次にロザリンドはドーランという化粧品を試してくれた。これは舞台役者等が使う色の濃い白粉みたいなもので、見事に俺の手の甲に浮かぶ文様を塗り潰してくれた。

ただ、手が真っ白になって、包帯の比ではなく不自然だった……。

「赤ずきんの婆さんに化けた狼じゃねえんだからよ……」

「ぜ、全身に塗れば手だけ目立つことはないんじゃないかなハハハ……」

「そんな白塗りオバケになって学校行くのごめんだぜ……」

「……………」

二人で意気消沈する。俺は期待が裏切られて。ロザリンドは面目なさそうに。

「……大船じゃなくて泥船」

背中を丸めたロザリンドを見ながら、マリスがニヤニヤ笑っていた（性格ワイイ……）が、ツッコむとまた二人で大ゲンカ始めそうだったので俺は気づかないふりをした。

居間に満ちる、何とも気まずい空気。

「兄ちゃん、シンブルにこれなんかどう!?」

それを楓子がぶち壊してくれる。喜び勇んで俺に黒い布を二つ、手渡してくる。

いわゆる、指貫手袋だった。

「……京極夏彦じゃねえんだからよ」

常時着けて学校に行くのはいいかがなものか。

「でも、冷え性の女の人は、普段着で着けたりするらしいよ?」

「つつても冬場だけだろ? 今、八月だぜ?」

「ふむ。しかし、包帯やドーランよりはマシという気がするね。さすがは楓姫だよ」

「……黒というのがオシャレ」

ロザリンドとマリスも名案だとうなずく。

そう言われるとそうかなあ? 背に腹は代えられないかなあ? :

とりあえず俺は着けてみる。装着感は悪くなかった。このままシャーペンも使えそう。

「よくこんなの持ってたな。ありがとよ」

なかなかよさげだったので、俺は素直な気持ちで感謝する。なんだよ、おまえだってたまには妹らしいことができるんじゃないか。お兄ちゃん、見直したぞ？

「お礼はこれでいいよ」

すると楓子は文庫本を広げて見せた。

「エレメントXIII」というタイトルのラノベだ。巻頭見開きのカラーページで、双子の女の子と対峙するワイルドなあんちゃんの立ち絵がある。「陸奥護狼」という名前のキャラだ。主人公たちからは「ゴローさん」と敬愛を込めて呼ばれている。

そして、ゴローさんの両手には、黒い指貫手袋が。

「コスプレ用に持ってただけじゃねえか！」

「へぎゃっ」

俺は手袋を外し、楓子の顔面に投げつけた。

「見直して損したわボケがっ！」

この妹はコスプレ大好きで、それ自体は一つの趣味として立派だと思うのだが、隙あらば俺にまでさせようとするので油断ならない。

「えー、いいじゃん。ちよっとだけやってよー。兄ちゃん、ゴローさん好きでしょ？」



「ぐ……。む。そ、そりやまあ」

ゴローさんは主人公たちの兄貴分で頼りになるナイスガイだし。ピンチの時には颯爽と駆けつけてくれるし。そのくせクライマックスでは出しやばらない控え目なところがむしろオトナツポだし。ちよっとスケベだけど、そこがまた愛敬あつてよ。

「で、でもだからって、コスプレなんてこつ恥ずかしい真似できっかよ！」

「マリスたん、やつちやつて♥」

「……。わかった」

気づくと、いつの間にかまたマリスの髪の毛が俺の首に巻きついていてた。

きゅっ。

「……。ハッ」

目を醒ますと、俺は居間の畳の上に横たわっていた。

「兄ちゃん、起きた？」

「……。大丈夫？」

楓子とマリスが傍で覗き込むようにし、また俺の意識を確認するためか目の前にかざした手を振る。

「大丈夫？ じゃねえたる、おまえらがやつといて！」

「きやー」

俺が怒りのままに跳ね起きると、楓子はうれしそうに、マリスはボソボソ悲鳴を上げて逃げ出す。

「……あ？」

そして、俺は気づいた。いったいどれくらい寝てたかはわからないが、楓子とマリスが服を着替えていた。

「兄ちゃん、これどうよ？」

「……似合う？」

楓子とマリスがハイタッチしたまま手をびったり合わせる。二人が着ているのは同じデザインの新セーラー服だ。「エレサー」に登場する架空の学校の制服。

……要するにコスプレしているのだ。

ご丁寧に髪型までいじり、髪の片側だけまとめて結んでいた(サイドテールというらしい。

後で聞いた)。楓子は右だけ、マリスは左だけと左右対称だ。ついでに今、キメてるポーズも左右対称。

さっきの見開きカラーイラストでゴローさんと対峙してた、双子の少女「石辺九部」と「石辺零」のコスプレだろう。

「似合わないことはないが……」

まあ外見だけは二人とも美少女なので、何でも着こなせる。

「ただ双子キャラをやるには顔が似てないし、背も違うし、楓子がバカ面さげてマリスが無愛想だと白無しじゃないか？」

「ぐきぎきコスプレなんて興味なくせに的確なツッコミ！」

「……英二はいちいち細かい」

二人が悔しそうにする。だが楓子は一転、意趣返しでもするかのように邪悪に笑い、「ちなみに兄ちゃんも寝ている間にコスプレしていただきましたー」

「のわあああああ！」

サッと手鏡を掲げ、それを見て俺は叫んだ。

ゴローさんの格好をさせられていた。夏場にジャンパーと指貫手袋……しかしそれはまだ我慢できる。問題は顔中に隈取のような、あるいはネイティブアメリカンのようなペイントを施されていたんだ……。

「この顔は何だ!？」

「え？ ゴローさんの【終末を告げる獣の性】の第一覚醒モードじゃない」

楓子がまたカラーイラストを開いて見せながら、作中設定をさも当然そうに説明する。「シナコタア問い詰めてねえ！ どうして俺にこんなアホツラなペイントしやがったんです

かねえ!」

「だーかーらー、このシーンをより完璧に再現したいんじゃない!」

開いた文庫本のページを俺の鼻面に押しつけてくる楓子。ウゼエ……。

「……剣姫がノリノリで化粧してた」

さりげなく密告してくれるマリス。

「あのクサレ演劇部はどこ行ったあ!」

「そのうち戻ってくるよ。それより、せっかくコスプレしたんだからこのシーン再現しようよ、兄ちゃん!」

「さ・せ・ら・れ・たんだ。せっかくもクソもあるか!」

「……してくれないと殺す」

「あああもおおやりやいいんだろがああ」

チクシヨウ、【鋼糸襲陣】使える奴は強いよなあ!

この殺戮の天使さんは何も考えずにボケっとしてるように見えて、好奇心旺盛で色々やって

みたがりなところがあるんだよトホホ。

俺はブツブツ不平をたらしながら「エレサー」を読み、そのシーンの台詞を憶える。

やれやれだぜ。

「さっさとやって、さっさと終わらせるぞ」



立ち上がり、カラーイラストを参考にゴローさんの真似——握って、空手でもボクシングでもない中途半端な構えをとる。

楓子とマリスもまたハイタッチで「人」の字を作り、対峙する。

「水城様の邪魔はさせないっつ! ——ここは通行止めよ、陸奥うう!」
早速、楽しそうに演技を始める楓子。

九部ちゃんつてキャラに比べると、声の調子が明るすぎるイメージだな。

「……わたしたちは山の化身。わたしたちは不動の権化。わたしたちは門番の中の門番。ゆえにわたしたちを崩せるものは皆無!」

ポソポソと小声で零ちゃんの台詞をしゃべるマリス。うん、こっちは元気が足りなすぎ。ハァー。要するにどっちも大根。

コスプレしたがるのもいいけど、もうちょっと練習したらどうよ?」

マリスはともかく楓子は「エレサー」愛読してんだろ? 九部ちゃんへの愛をもっと見せるよ、愛を! おまえん中じゃ九部ちゃんはそんなに元気っ子キャラなのか?

俺なんかこー、臉を閉じたらゴローさんの雄姿が脳内アニメ劇場だぜ?

しゃあねえ、イヤだけどっつてやるよ。

俺の演技、おまえら目をかっぽじって見とけよ?

「はっ、しえのびすんにゃよ、じょーちゃんたち」

「兄ちゃん、棒読みするならせめて囁まないでよ……」
うっ。

「はやくおうちにかえらないわるいこは、おにちゃんがくつ、くつ、くつ、くつ、くつちまうぞー」

「……英二、こういうのは照れたら負け」

「同じ台詞でも、あたしの脳内アニメ劇場じゃ洪クルのゴローさんが、兄ちゃんがやると変質者みたい……」
ぐっ。

「じょーちゃんたちのちいさくてかわいい、あおいおし、おしっ、おしりをつ——だあああ
あ言えるかあああああこんな台詞！」

もうダメ！ もうギブアップです！

ゴローさんが言ったらサマになっても、俺が言ったらマジ変質者じゃねえのって思えてダメ！ いざとなったら言えない！

は、恥ずかしいいいいいい。

「……『おしりを剥いてペンペンしてやるから』ってそんなに口にできない台詞？」

マリスが小首を傾げながら先を促すが、俺には無理ですわかって！

「グへへ、兄ちゃんの口から『お嬢ちゃんたちの小さくて可愛い青いお尻』なんて言葉聞いたらハアハアしてきた」

テメエは鼻息荒くしてヨダレ拭ってんじゃねえよ楓子！

「もうやめる！ もう俺はやめるぞおお！」

畳の上に大の字になる。殺すなら殺せっ。

「んー、今ので満足したらからもういいや」

「……次回は敵同士以外のシチュエーションでやりたい」

まだ鼻息荒い楓子。恐ろしい希望をさらりと言うマリス。

「ひあああああああ」

俺はまだ羞恥が抜けなくて、畳の上でのたうち回るしかなかった。

「（・ー・）」

十分くらいうずくまっていたら、さすがに落ち着いてきた。起き上がり、茶でも飲もうかという気分になる。

「いやあ、やっぱコスプレは楽しいねえ」



楓子があっけらかんと笑いながら、左側の髪も結んでツインテールに戻す。

それはいいのだが――

「……堪能した」

マリスのサイドテールがニョット引っ込んで、代わりに後ろ髪がニョット伸びる様を見て、俺は口に含んだ茶を噴き出しそうになる。一本の紐が頭を貫通して綱引きでもしてるみたいな絵が脳裏に浮かび、自分の不気味な想像に鳥肌が立ったのだ。

「よくよく考えたら、マリスさんの髪って超便利じゃね？ オシャレ的な意味で」

それを見て楓子が目を丸くし、マリスが調子に乗って後ろ髪を引っ込め、楓子を真似してツインテールにしてみる。

なるほど【銅糸鑿陣】で伸縮自在なんだから、その気になれば好きな髪型にできるのか。

「……英二はどんな髪型が好き？」

「えー。じゃ、ストレートロングやってみて」

マリスはコクつとうなずき、髪が全体に伸びて真っ直ぐサラサラなロングヘアになる。

「……どう？ 似合う？」

「お、おお……これは……。ちよい待ってる」

俺は大急ぎで自分の部屋から学生鞆をとってきて、マリスに手渡した。

「……？？」

「立って、それ両手で持ってみて。ああ、後ろ手じゃなくて前で。で、目を閉じてしずしず歩いてみて」

「……こうか」

俺の指図通りにマリスが目を見せて、まるで名門女子高に通う深窓のお嬢様のような仕種で歩く。俺はその様を座って眺める。

おおお……。おおおおお……。こいつに笑顔は期待できないからと、逆方向から攻めてみれば……。ゴクリ。

あれだよ？ 何て言ったっけ？ 最近読んだ漫画にあった台詞。

ああ、そうそう！ 立てば芍薬 座れば牡丹 歩く姿は百合の花って奴だよ、まさに。

その表現がピッタリ！

「……いつまで続けるの？」

「ごめん、もうちょっと」

ヤ、ヤッペエ……。これほんとにマリス？ 俺が知ってるマリス？

うわあ美人って得だなあ……。でも性格で損するもんなんだなあ……。

胸がドッキンコ、ドッキンコ鳴り出した。

「ハァー」

と、俺が嘆息しながらマリス（お嬢様VER）に見惚れていると、

「コスプレって萌えるでしょ？」

いつの間にか後ろに忍び寄っていた楓子が、悪魔のように耳元で囁いた。

「ギクリ」

「快感でしょう？ 可愛い子に。自分の好きな格好をさせるのは」

「お、お、俺はそんなことは……」

「隠さなくていいんだよ？ 兄ちゃんだけがおかしいわけじゃないの。それは人類すべてが持つ業なの。さあ、もっと兄ちゃんの趣味をさらけだして？ このあたしが肯定してあげるから」

「ううう……」

「だから一緒にスカートの中を覗こう？」

「おかげで目が醒めたわありがとう！」

俺は楓子の前髪をかきあげて、ズゴッとデコピンする。

あつぶねえ誘惑される寸前だったぜ……。楓子が悪魔になりきれない奴で助かった。

「マリスもサンキュ、もういいぜ」

俺は礼を言い、髪型を普段のショートヘア＋一本結びに戻させる。

よし、マリスのストリートロングは今後封印だな。日々の勉強が忙しい身にとつちや目に毒だな。

ちなみに楓子がデコ押さえながら涙目でなんか睨んでるけど無視な。

「しかしロザリンドの奴、戻って来ねえな」

傍にいるとウザいが、目の届くところにいなければいいので、何かしでかしてやしないと不安になる。

——と思ったら廊下の方、襖の陰に赤い髪がチラチラ見えた。

「何してんだ、ロザリンド？」

「い、いや、ちよっとね……」

襖の陰に、完全に赤毛が隠れてしまう。

「そんなとこいなくてこっち来いよ？」

また何か企んでるのだろうか、俺は半眼になった。

「ボクのことを見ても、笑わないと約束するかい？」

また妙な条件をつけてくる。そんなの見てみないと判断できるわけないだろ？

「ああ、笑わねえよ」

でも安請け合しちゃう俺。ウヒヒ。

「絶対に笑わないでくれたまえよ？」

ロザリンドはしっこく繰り返しながら、おっかなびつくり襖の陰から出てきた。

「う……」

念を押されなくても、笑うどころじゃなかった。
むしろ、啞然あぜんとなるしかなかった。

「そ、そんな惚けた顔をしないでくれたまえ。照れるじゃないか」

そう言うてはにかみながら頬をかくロザリンドは――

ドレス姿だった。

大胆に開かれた胸元。露あちわになった真つ白な肩かた。レースとフリルとスカートで強調される女らしさ。

ぶっちゃけてしまえばコスプレ用の、偽物のドレスだ。生地も縫製ほぎはぎも安っぽい。

でも中身の素材が――着ている奴が超一流だから、俺は目と心を奪うばわれずにはいられなかった。

「ボクが着たいわけじゃなかったんだ。楓姫の、主君の命だから仕方なく。

どうせボクには似合わないって言いたいんだろ？ 思う存分笑えはいいさ」

俺が何も言っていないうちから勝手に弁明べんめいを始め、あげくさっきの約束と矛盾むじみするようなことまで言い出すロザリンド。

超テンパってる。

「ええー。せっかく兄ちゃんがゴローさんコスやってくれてるんだから、誰かが一子かずこさんコスしなきゃダメでしょー」



と、ロザリンドにドレスを着せた理由を楓子が説明する。ちなみに「一子さん」つてのはゴローさんの恋人だ。四巻で出てくる。

「……………」

けど俺は二人の言葉を半分聞き流し、腰こしが抜けたようにあぐら組んだまま、大口開けてロザリンドを見つめていた。

だってだってだって卑怯ひきようじゃねえかよ！

いつも男物おつものだの鎧よろいだの着てる奴がいきなりドレスとか反則はんそくだろう！

「一言ひとことくらいあってもいいだろう、英二君？」

よ、寄るな！ こっち来んな！ 俺の前で横座りするな！

いつも男みたくないな仕種しくまの奴がいきなり女つぼくしたら反則はんそくだろう！

「わかった。ボクも訊きき方がずるかった。ちゃんと聞こう。『今日の私、綺麗きれいでしょう？』」

ロザリンドの口調くちやうがいきなり変わって、背筋せきすがゾクゾクとした。

「パーティー、抜け出して来たんです。護狼ごろうさんが行くって聞いて」

それはまさに一子さんが作中で使った台詞たいしなんだけど――全然、演技ぎやくに聞こえないんだよ、これが…………。

まさに俺のイメージ通りの一子かずこなんだよ…………。

「迷惑めいわくな女おんなだって…………思おもってますっ。」

そんな潤んだ目で見上げんなあ……。
 「でもいいんです。ワガママだって思われても。軽蔑されても。護狼さんを死地に行かせるよりは……」

そんな僕はかなげに震えながら、抱きついてくるなあ……。

「お願いです。天呼てんこさんより私を選んで……。今夜は放さないで……」
 ど……。どうしたんだ俺の両腕エ……？

なんで一子さんを抱きしめてんだ!?

正気に戻れえええ。こいつはロザリンドだぞおおお!?

俺より背が高い女だぞおおお!?

でも座高は俺より低いのかお互い座つてるとちっちゃくて可愛いんだぞおおお!?

ドッキンコ……ドッキンコ……。

「うふ。護狼さんの鼓動が聞こえる……」

ドッキンコ！ ドッキンコ！

「ムッハー！ 兄ちゃんの大根がまるで気にならないほどの名演技やわあ」

もう俺には、自分の心臓しんぞうの音と一子さんの声しか聞こえない。

「……浮気者は殺す」

俺の腕の中で涙を流す、一子さんしか見えない。

そうだよ……。この二人きりの世界で、俺が一子さんを笑顔にしてあげなきゃ誰がする!?

それもできなきゃ男じゃねえ!

「うおおおお俺がキスしてやるんやあ!」

「ちよっ!? 正気に戻ってくれたまえ、英二君！ でも英二君ならボクは……」

「その涙を嬉し涙うれしなみに変えてやるんやあ!」
 と、俺が唇くちびるを失とがらせたその時――

「……警告はした」



首筋に、青い何かがからみついた。

その冷たく硬かたい感触に、我に返る。サアアと血の気が引く。

振り返るとそこには――

ザンバラに伸ばした髪を蛇へびの群れむのようにウネウネと蠢うごかせる、神話メデューサの化物サもかくやのマリ
 スがいた……。

きゅっ。

」(・ー・)」

「いやあ、生きてるっていいなあ」

その日の夕方、俺はベッドの中でしみじみ呟いた。

メデューサと化したマリスに襲われた後、どうやって助かったかは憶えてない。恐怖で記憶が塗り潰されてしまったからだ。きつとロザリンドが助けてくれたんだろうアヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ。

とにかく生きてるって素晴らしい！

俺は勉強机の上に投げ出されていた、指貫手袋を装着する。

うん、来週からは毎日これを着けていこう。クラスメイトに奇異の目で見られたり、担任に校則違反だと嫌味を言われるかもしれないがそんなことは小さなことだ。

生きていられるこの奇跡に比べたら、全てはちっぽけだアヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ。



あるいは現在進行形の黒歴史短編

— この二人きりの世界で —

発行 2011年2月9日 初版Web公開
著者 あわむら赤光

発行所 ソフトバンク クリエイティブ株式会社
〒107-0052
東京都港区赤坂4-13-13
電話 03-5549-1201
03-5549-1167 (編集)

©Akamitsu Awamura

GA 文庫